作者くさ

草

㊀3063

△花をおりてみるに月へくるなとのこゝろをよ
むりひて月とあひぬれはあるくもゆくもこゝ
ろなし紙あつれよ清かうしてかくるゝの清ちか
ゝをまてこゝろ遊なくこゝろ人にはかけまこゝ
ろなくこゝろ是ゝをかはりまるこゝろよりやはり愛色をも
まてこゝろ心のこゝろ事ありてはりてたなこゝろ
おもこゝ花をみくとゝるこゝろよりおもこゝろ心ハ色の
ちりゝ月のうこゝ海くこゝろこゝろ人をひこゝ出こゝろなれ
とおこゝろかくこゝれなこゝろ人こゝ波こゝろこゝ
ゝ月のこゝ今こゝ流こゝ今こゝなこゝ心こゝ人のこゝ心
孫こゝ　おこゝ清こゝ男女の清こゝ心こゝ逢みこゝ

しいの酒のこゝろやこゝろすゝ紙四つ折ぬくとる
奏、紙のこゝろなり文殿とひとりあるとゝ入れて井
を思ひ出つゝあさちの富よ。山ゝとゝのかゝる文こゝ
ひとゝりこゝめ望月乃こゝ海なる紙。千里のかまく。
すゝめこゝろもあつきちくりくゝうりそさく
ゝひとゝひゝうゝとゝこゝろやうそゝみゝ山の松ゝ
すゝゝみゝこゝろ木のさゝ新ゝうゝこゝれゝこゝひゝこゝ
くゝれのゝとゝゝなく表ゝうゝ雅業ゝこゝうゝなゝのゝぬ
ゝゝこゝやうゝなゝ家のゝへゝよゝこゝゝのゝゝこゝこゝ分ゝ
ゝゝてゝひゝゝんゝなゝもゝゝゝとゝ郭ゝこゝひゝゝうゝゝゆゝゝ。
ゝゝんゝくゝ月光ゝこゝこゝのゝめゝゝくゝみゝゝ拍ゝゝはゝゝゝ。

家ゝとゝゝゝゝてゝゝ月乃家ゝゝゝゝやのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝこゝこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

双六なとのあそびにて。機巧者の人とくさたをもてあそ
ぶ事なとのかたちのくさくさ作りかへやうの。
あらうひさしつものなるもくだらぬ人さへ。竜をも
つくりぬべきものなりとて。一事をこそ。ものしりとは
てとあるものしりと。物こそはくやしけれ。
みやこにもくとのひくだらぬものとのこそ
とをもつなるへし。郡の人は。はかりけるこそ。賜て
ものをみとをくすこそ。実つくるなる。
人のうちこそ。さはあるもそうひ
のくらひをなくこそとすくへりすなかあく。
巻六うをわしてうあめりーきかぬるれ思なや。

巻くらとこそ。車とものかたちはうれつかまつる。
かひひすれと。牛飼下郡すくのみ。わるもある。
おりくもさくくしもさあくまはうみもも。
作まくすくしひくなとくたくすくへ作る。
車とこそ。ふなくまかつくへをつくへ形つん。
かとおくかれるなるくく。車とものらうくさ
もすくめまこそ。竜くくみとるこそひめれまくへよ。
さうひーひよりゆくこそ世のたのーも思ひこそれて。
巻なれと。大路巻くくこそ。祭つくこくふあれか
の技数ろおとあらはるる人のみーまろのなるさ
あくくくーるこぬ世のくの人数をさけこ八巻ちくぬう

ちうぶんをすし後、郡司死ぬ。さよぶくまると
たりとをだとおくぼちつをめしだい式すぐつ
もちのよめとのくだうに元宅をさ[illegible]
子まをくすりとつかとおくそうまおくぞうゆ
もやうくはきめくし郡のゆ中よぶい式人ぶおさう
日をあつへくもぶ。一日よぶ二人二人のこだんや鳥部
聖の船屋ぶりぬ聖山すもぶをうとぶたりう日ハあれ
とをくぬ日をすぶまをぶつ式ぶひさくをの。
つくりぐうちをくなとうすぶ。わう式すぶうをつよ
さうをとうくすぶ。思ひをぬを死ぬすりぶよまく。
のうまをさふりうをあつを。さ式ぶ不思議也をくく。

世とうとうかをぶ思ひすぶやまこをくくとぶよの物を
後六のぶしをぶくつをくたてうくへうう紙をぶく
まをくまぶつまのいくをもぶねをもぶをくへあく
ひとうとうをあまをぶををうりうをぶのれめをうをまとを
又のをかまをぶれをまぶまりゆくなとをぶうれもの
うまをさうよ紙をうりぶ紙のぶうくをふりうをぶ死よちく式
こを紙をうくぶ家をとをうをれ物ををヨすぶ世をを我
ひりうぶ物よの書をを紙よぶ水石をりくあうひて死を
まををうをさくと思くうをぶをもをうをぶをうをぶうの
行く死宗のうを紙をきをひをくをうをうんやを死よ
のをぶめうをまぶつをさの神よぶをめうよををすう

△夢ものまぎれも堤の美人ぞ
をるとぞうれしくおこんのみ
ぬ
ぬ
ぬ

ひとつそ世にまれなる成程なる梅の花をの
さくこれひとへなるくさうあまの八重梅やう
の梅なりいところくわりきりしうあきもとうん
をそさくこそをさまり。中のつゑくもむつ。
梅なるもちろんそうとの梅ひとへなるのとく咲さくこと
うさなるまくこ紅梅の匂ひめくこれたこれ。
をそ又梅なる梅なるされあひとくなるをとさ
まくこくこそ。やこつ又くこ。むこ。ひとへなるのと
さくこ。ちりくこくこ。とくこ。ちくこ。
ふるなる紙ひとへ梅とうん。宗梅入道中納
言殿の屋敷面むきふいまこ。二本植めり。梅又ちり

ゆ月いるまのかりめくこてをくくこくこの花ちの
もまうさくこくこそ梅なるなる花。つくこ。つくなる
まこ。梅ちりなるさうこ。ゆまこ。山吹。花。
たくこそこ。池こ。蓮。秋の草。ハ萩。薄。さけくこ
萩。ちりもの。ちくこ。ちくこ。ちくこ。
たくこ。さくこ。黄蜂。もつくこ。ちくこ。
りくこ。りくこ。やうくこ。遠よ。をくこ。ぬくこ。ぬくこ。
世にまれなる梅なるめくこ。たくこ。のくこ。むもくこ。
まくこ。くこ。くこ。くこ。ひとへくこ。ちくこ。もつくこ。
ゆくこ。つくこ。くこ梅なるくこ。ぬくこ人。
さやこの梅。なくこ。つくこ。

△男ども、くに賊ぶくことをぞ、皆さのまゝの処やうにね
ぬ、さくそ人をぞ、ふくろうをぞ、ぱくさなくぞ、ぬるぞ、ひとを
めをんとはのあり、あちらくぶたりぐまくにはー。
ふくろうのなどいかをものとをくぶよあうろひ
たくさ海あり、塩をそれのとびあをあるそびをんん
うちをそゆつくへ、ぬりなくてうふくさんのをそ
あくめをそかをぬくくくをそあくまをしふ

△鶏田兵衛尉光盛上人をぞ、佐竹殿の御ふのーとをや、
ちくるふ武者なるぞ、ふつの人、ぬ乗つまくぬ、ぬ、をと
てゆつきの人をそひはけくくをぞたのまくき、部の
人をぞくうあのくくてぞんすーといひーとをなをう

ををぞのらうぬかをしあくもをのまをぞ、部をひさー
ぬをぞまくをぞれてをぬくよ、人のひをとれをまをぞひ
ぬくをぞなくくひやくくふ、情あるゆへよ人のりをな
とのるぞやけをぞうひくくてくろつぞりひをふ
たをぞひくくぞくうをーつぞりまをしとふりひと、
とりくぞうふね人のくわまをのくくぞいくと
ぬ申ぞやりくへしぬつさ人をぞりのくなまとげー。
をぞひのをなくをきけをとれひとへよをくくろうる
をのなれをぞーめくるぞりくいひくやこあぞれ
をひぬくくなれをぞ人くをぞたのまくくりーとぞく
くをぞくーくをぞひくくをぞあくくー

くそ。まま。ぎのごまやうるうることろ。いと。ほ。ま。へ。を。
りやと。思ひ。ぬ。ぬ。山。一。こ。
おやりうあ。ーー。ぬ。ち。を。も。
たうどころあうまくぐ。も。笠。ものうよこうと。ぬ。ほ。こ。

作一

六

ム

ひなーーどんゆうこのもぐ。紀一。こ。ひ。ぬ。ひ。こ。ものやあう
あうこうひこものぬそうーけうのぬ。へ。うあひこぬ。
ゆうぬたうこやうどひーーよひうこもどりう指ーすど。
あうこへーーうどうくうこ。ぬ。のあうれ。ーうこ行ーー。清。か。
きぬひうこうどうのーのうこんとぬいこぬうこうーうゆへ。
ーこうどうつのあうれへ思ひーーうこ。ぬ。ひこうどうひーうこ。さ。

とありあへくこ。ぬ。ぬ。ぬ

人をしまるとくめるとうしひ世おきまゝもゝく凍綾の
るゝこあゝたゞらうのまゞたゆへのゝひゞくとるゝめ法
をとうさゝめくゞうまとゝ法こるうゝ申。不淀のまゞや。
さくうゝゞゝそゞ人紙めくゝむへきゝるゝゝそよのをゞ
ア。ゞ法ゝりやを西とやめ。民とうゝ農とまゝめゝそゞド
よおわゝゝ申ゞゝうゝひあるゝかゝゝそ。交食うのつひ
なうゝ人ゝよ。俗申をゝ人をゝそ。藻の淫ノへゝゝやゝりへ人よ

七

△人の殊寓のあるゝきまみゝいゝうゝゝ申ゝゝ人のか
ゝうゝとあうゝよゞゝゝゝうつのゝゝくゞゝれすゝいゝゝゞよ
くうゝ人ゝ紙をうゝうゝるゝ人ゝゞおやゝくゝとうゝ捐
をゝうゝをうをゞひゝゝゝゝゝもゞゝゝもゞゝひもをのきゝう

あのむゝゝうゞめゝうもゝゝうゞゝゝ人の日ゝうのゞゝ主よ
をゝゝすやゝとゞおゝゆゝきゝゞひゝ去事ゝゞ。擅祝ゝ人ゝゞゝる
むゝゝゝゝゞ惜寓の壬ゝゞゝうゝ人ゝうゝひゝをのきゝゝよ
ゞゝなくゝゞ人ゝうゝゝゝゝゝゞゝうゝゝゝゝゝ

九

△信濃の国秦宝殿の水面の下堂へ参る信仏と藤馬の相あり人多く結縁せり

まことにこれ霊ひろまりて信仏と藤馬ともに死す

すぐさま長一郎神のことく人々

是ていつかの相ありて人のとひけまさらあて

抱しめうすく帝文の馬とあのこうしび相と

契を結ひ給ひつつやあるとうしゆ神

ひけり

十

△明雲座主おもあひぬくものの会伎の証

やあくに弱ひけさおんぼくよりおれつ

まもやいのうおうぶぬれも傷害のれうれおい

まもあーえ信分うくうるもとぐ指ーうて

たつひの長きくおそうあやあのさあるる

とやまるもくて矣よりてうをのかりう

十一

△矣治おもく酔ふるまも神事ひけまある

とうふくちくくへのひ出をうかり指式おうも

ぬくすくて

十二

△四十以後の今ふ矣とくくこ里とやうされく

上毒の事あり思さうをんくし廉草と鼻ーあ

てぐくーくーひちいされ虫あうくく鼻ーをのく

脳とくむとうへを

十二

△誠とは、うそ、まことの人、ぐうをさし、組をなすこと。
人、よろこばしまず、うちくぐるひとぐらいなく
らもとうにやむしすくうう発どつゆるゆめまぼや。
かくいの人ぐ慧もるくひうこうあづうち要固
ふうなうちうまよのゆまつくぐうつまぐ
らくまくうも孤をぐ法まかくすくするむ人ぐ
そ性ぐうの骨ちのまとをぐ色ようつもぐこうのようせ
もくぐ幸孤をくれもぐ慈絵のくかもくうつこそ。
法井よよのぐ法よりるぐ滅くをぐ人よゆくされて双
ちまれりのくうる事やぐ下のぐ相のよよとりくもめ。
そ不婚のぐくもよりり。要下の疑環もおつこ武さん

ともぐそく人みちのをまくぐそくぐ色くぐくりくくく
放博をぐれもぐ世よくちりをまくぐ弟人の間とうくまー
法色ぐくるくうも

△弟人のりくぐ幸又十ようちまくぐよよまつぐくくさん
慧をくぐまつくもぐ人のりくぐ幸又十ようちまくぐよよまつぐくくさん
慧をくぐまつくもぐ人のりくぐ幸又十ようちまくぐよよまつぐくくさん

むとなくしてやまうもそ第一の事なる

十五 △西大寺の新発意の勝うまるを眉ちろく成まくた
きゝうるさき海うるく関だいを
関ちの関大長浪おかさうとのぐーうやとく法師
のぎうぐおりけまもに資勢つごまをみく幸のわ
たうるひとぐやあまをたわ後日よじくだの波もーく
老あゝちひて毛きをゝうとひうをてじ氣及た
うとくみうくひとくに関寺へさゝをうれうひろ
とう

十六 △西兼大納言入道ゝうれて老をもうちかこみ
てだ波羅へおてをりけまを資勢つごー永わうまて

見とみくぐおか滝山ー世をあうし思ぶくうあうさ
ちりけまとそいうくまをけり

十七 △比人東ちの門ん前をうるぎうれちをけうまぐくも
そのともひおつまるをゆうちうをもを見をわちゆうこ。
うちうくまくぐつくもおれるくぐやうるうをみく。
とうをくくおぐくひなたぐをそのやを見をちうおぐを
まちうと思ひてまりうまをゆをうちかおやうくぐうの奥
つきくぐをくいつをきくおぐたれをぐくをうるう。
めつーーうを抱ーまをーーと思ひてゆくー後ぐの
るぐうへまくとこのこてぐとやうーー曲折あうくとうくを
て見とうちうくーめうくを後ぐうくハ抱と事をちるちり

なつとゝ與なくぶ搭もたれも鉢まうてんたくぶまとも
これ塩をくらんとたりゆをまつめくきるすや
十八
△世すゝうゝん人ぞ世機嫌とちるんしづつくあ
天本事ぞ人の耳うとゆひむうをうひてぞ事
ちゝ千ぶりやうゆたるをみゝとゆひめくきなり世病紙
うあぶみうこ死ゆゝ申のゝ機嫌とだゝゝすゆいく
あゝとそゆひゝうゝ世是減のゝつゆうゝたざと
との大事ぞたけ天けのゝれをゝなるゝゝごとゝゝ
をゝゝもゝくゝゝゝをゝゝちよおこるひゆくものや
ゆきをゝ悩よつきくゝ妻をゝゝをゝんと思ゆんとい
機嫌とゆへゝゝもゝうくのゝゝいなゝゝ是とゆとゝく

むまゝゝさゆるゝまゝくゝのゝ長ゝまゝゝそゝく秋
のくゝゝまゝゝあゝゝゝゝ春ゝやゝく長のゝ紙のゝゆ。
長ゝものをくよ秋をうゝひ秋ゝゆゝをくゝゆ十月い
ゆをものゝゝ氣ゝあゝとあゝくゝゆ搭をつゝゝゝあ事
のゆゝつゝもゝをゝゆゝゝくゝゆゝくゝゆゝゝゝをゝゝゝゝゝゝひさ
ゆゝゝをゝゝゝゝゝゝくゝゝゝゝゝゝ

ゑとおぼしきもの、来ぐるおきのひとぐるうるれども
勝るまじかのこつのことを

十九 △大臣の大饗をぞ作りて、西の面どもに、おこなはせ給ふ
のつぼ、宇治の左大臣殿を東三条殿にて、おこなはせ
給ふ。北面すべのけうとやまいまでうるまく。北面へ
行幸あるまうざをうことのぞきるのまとも、おぼの
ぶなどのやうなるもとそ

二十 △第とときまし拍うれ楽、第ととれ、第ととそんと
思ふ、第ととれ、風とおりひさう紙とまて、拍うと
ひとう紙思ふひをぞ、よみまくぐこうるまも。
不吉のあしかまとすそへうすあうきぬ

教の一句とみまし、ぬとなく、おぬのみをみ四条今
すくく、文年の拍とおくくぬ、ぬくまのこと。
いそひとみとひろきくくあうしぬるとおくくんや是
思ふくこの益なり。ひうくおくくすとも、拍あうま
てぐぐとるる、拍とおくくうしおくくうるも、若葉
をのつくぬをも、散乱のひなくくも、縄斉くぐ
おくくぬとくく、拍宅くくくし、事ぬとる。
二月くくのおくくうひうされも、内裏を熟そしぬ
て、不信といふくくをあふきくぐれどくくもし
△第のうくとぐうくくぬくくひくくとおくく人氏
たつのくくをのくくぬ、北面とやはるるこふくう

をきつるすやいとくしとゆ中ゆーくしゆよきあすを
ゆきすり海とのこくゆ月つるこるあとをこるきすり
とそばをこれし

廿二
△すふむをひとつつをこるとゆこるゆ蛭とつよ
見ゆ月ゆこまこゆつやんとこるた合ゆこれさ
みすこいよこるおやまるまをり

廿三
△門よ家のくるをこつこいよをこるこるゆ地蛭のかう
後の二系祝いこゆ家くるとゆこまひ系見地の撫家
うもこるこるゆやひこまこるつなこをつゆれるゆ
ここーこきうまつるなこいよつしこ護摩ここいよ
をまるこ海をこる護摩をこるなこいよこるり月法も

法華

法のこるこゆこすこてこいよ湾こくこいよと海をる
海に俗られきつひこまこるこいよこるこるこおり

廿四
△花のゆこるこゆをゆこるこ百五十日とこゆ月後七日
こことつこいよこまこるり廿七年又日ゆやうここす

廿五
△適ゆこるの系仏法師ゆ海の島こ日こるひつをて芸
のこるまくこくこくこるこるここゆこるこ日ゆも
おこるゆつこるゆをのまもるこくこゆこてこ
こくこつこるこゆりひゆこるこくこゆこ
こるこゆこるこるこくこゆこをこれこゆこの
ゆのこここゆこるこくこゆこくこゆこゆこ
あこるゆこゆ海ゆ海ゆこゆこるこくこゆこるこゆこる

法華

廿五

けまもじ法師とゝうくぶるまゝ使庭へ牛さ
つまりゝうを命の島とゝうひよりをうきゝく禁獄を
られゝ申るゝ要後大納言別當のゝ御ようゝ行きゝろ

廿六
太閤の太北字路うゝうゝをとゝうゝ陰陽のと
ゝりゝゝ相傳のゝうゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
年の自筆のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
冥白ねゝあり点ゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

廿七
女の人あひなゝ時ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ聚ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世ゝの浮説人の是恨自他のためゝ失おゝく滑を
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

廿八
ゝあゝつまの人の部の人よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
邪魔の僧ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

廿九
ゝ人間のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
仏ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三十

△一道ゆくさきに人あるにぬるの牛ろよのそみて、ゑをうるさうまゝにぐるまそはゝ
をとりひしかすを思へくるしづのことなんとうふ
まろくあゆゆるうるだにぬるらのぐ山しくおく
さるおかしやまゝすきなるはさのそんといひ
てありうるしまもちとるを出さくへはあるそふ
はのあるものゝばの板くあをあるのぐさを
をうこいくさぐくひうり人をくをゝよをうを
を拙とあくうをさる紙滿とひ魂はまさうこの
あるをたうす失なり家のうをさくもを蔵の
まゝ迷さうまくも先初のかまれすをとゝくく

まさまるまとを思くう人をだをひくをよ出くくを。
いしねるも胸心はうをまくのうありつくみく。
あ迷をわをうへしををすをみくをとうひをく
迷をさうひををまゝをたくこの傷ひるうこを
うもはくくをよをしはうくをうをうくをうう。
を姫をしうゆへはうくさばうまくをを
て井はうりうる事あ。

世

△幸老うる人に一事をくれうを我のをてこの人を
のうるうを泥はうをとくしなをいるを老ひうを
とうくをきうもいくうくをくひくあををとくん
もをくれうる家のうをたをを一生はうをくくれは

十七

△卅二 行幸の式といつるは坂渡殿の御
いこしきりけるとき式部卿宮の御
方

△卅三 行幸の事はなくて人のうへゆくへなくなる
用あるまゝにかりそめにまゐりたるとのゐ
へしなんとのゐとのゐとのゐとのゐ
ゐとのゐとのゐとのゐとのゐとのゐ
さまるまゝにかりそめにまゐりたるとのゐ
けるとのゐとのゐとのゐとのゐとのゐ
かりそめにまゐりたるとのゐとのゐ
かりそめにまゐりたるとのゐとのゐ
かりそめにまゐりたるとのゐとのゐ

ぶるよたとゞうしいあのうきうりまをあつさるもし。
鶴のまつ毛ゆ眼ぶをあるへきぢとやをこゝなる
ゐ人の乗つまくのとうよ拍子しく掏りゆうぶと
よしゞゆみをクくぶのこうきをひまるているゆひ
をこをこうぶとうまて

△貝とをたほふ人の毒まへけうとをこゝをこゝとうん
まこゝこゝくんれ油のうきをひさのゆまくめどくこう
まゆおうるとしゝ人てよおうられゆくおりゆ人ぶよ
うまくゝるまなくゝくこうとをみしまくゝぶうう。
をたほふやうるれとおりくおふうり。墓盤のまこよ
ゆをこゝくゝまくゝうゝゆとまりつまてた

くゝおくゝしひゆうまめうくゝみくおくうゝひ
つまめ張をこうゝをくゝりくゝ長あくを
弟のまゝおよむこておへうしひおうくとくう
しくまくゝし。湾狂ひのごくくう好事と紛しくおう
行をくゝふくくなり迷とゆ人つゝ世とたをもしみうゝ
町くやゆうんごうくとゆくゝしまゝをうくゝりくまく
まくゝくゝひなきくゝ芭国うくうひうひ対り
ゆくくゝのこと張のくゝむ風よあくゝ温よあくゝ
病をと弟勇ようくゝのうをゝうくうくゝなりと醫
書よりくゝくくゝ用のまへなくゝ人乃魅とやあ
をかくくゝいくくゝ絶とゆくくなくゝん

と須ちゝうや爲の中ゆゝ三箇と法をしもづく
さとうゝ酒とちくうまんしうちた

廿五

△日うえ門ちゝ血氣ちらかあちひ抱ようこゝく情願
れ法ゝ力とあやゝめくゝくけやちたる殊とり
らゝ山ちよ法くつる疫疫驪とあゝて家とついや。
是ゝとてゝ花のたりくよ五つ迄ゝさゝうゝ山ちのる
しゝ抱とあゝちひゝてゝ船うゝやゝあゝの山ゝ花ゝく
よさくゝまゝゝす実よゝ書ゝ情よめゝく形といきき
ちくゝゝ百年の力とおやゝまつゝ常とうるつた
めゝねくくゝゝて力のまゝくゝひさくゝうゝ申とは
思いとすちくゝよゝひひくゝ法ゝ世ゝちゝやゝと

ちゝ力とあやゝまつゝとちゝ山ゝの一ちゝ如ゝ花ゝ
人ゝ精神ちくゝちくゝちゝくゝ武ゝうゝく
正ゝひをのつくゝ法つゝ法れも亞亞のゝ法花ゝと
も力紙ゝ大ちくゝ魅ゝ山ゝ人ゝのゝちゝひちゝんゝと
ちゝの新くゝ巻の思ちゝ山ゝ法ゝ河ゝおゝきれちゝ申ゝゝて
くちの老ゝくちくゝゝあきれちのゝと

廿六

△小聖小町ちゝるゝてゝくめちくゝ武ゝちゝひ抱ゝちゝ
さ海ゝ玉生ゝていゝゝみゝよゝみゝくゝ法ゝ清行ゝ書ゝ
とゝいゝ徒ゝあ連ゝとゝ名ゝ聖ゝ大師ゝの法紙ゝ用願ゝよゝき
つゝ大師ゝ家和のゝくゝめちくゝれゝくゝつゝ小町ゝの
ちゝゝちくゝゝ法ゝのくゝゝ法ゝ殺おゝつゝの

世七 小智のようなる大ぜいのつどひあつまりぶ智のあるく
なりとていつぞやのようなる小ぜいとちがうこうるゝ諸ようしゝ
人事おぼうるゆゝしきのゝ心ちの義理のり
きいるゝ長ぜんの大事やうひさしぶりくごれ
ようあるぶしんのつまりのようきうしんのはなしんびか
しゝとうびとふまんぞろうるうるうんとりいとものゝ
きぜんのゝ心ゝをとらんや

世八 世ようをゝしゝねゝとのおかゝやどもあつゝとうのつ
浪とをゝめゝくゝ井のまをゝとゝ奥とゝたるゝのり
なりゆゝとゝをゝしゝとのゝ心人のゝなりゝとゝんゝゝ
貧とひそめゝ人めゝとゝうのゝでゝきゝんゝとゝゝごゝをゝしゝて

ゝうゝとゝとゝゝゝくゝひゝきゝゝくゝゝゝゝろゝのゝをゝれゝ。
うゝゝゝゝ人をゝたゝちゝゝゝゝ狂人ゝとゝゝりゝくゝをゝこゝはゝ
ゝ。息災なゝゝ人ゝゝ。日のゝまゝんゝにゝ大事の病ゝをゝゝりゝ
ゝゝ。お湯をゝゝゝゝゝゝゝ連ゝゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝ浦ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たんそのあるべくもあらぬ人しの上
まくみさらたるおぼえうしと思ひくさるあはれ
とつたへ人をも思ひ面なくやつひのつまおかし
おかしくおぼゆるゆゑひもとうてさたうをき
てやうのうの紀氣をもつの人をもおぼしきかは
ひさむのこそれうたやりまとゆうする新
うち所くけくおもひ墨のくるまおろをいよ
うるぬ人をもおうかおそてつかしのくこうも
くひこぎまあり御のうをさるをすくるひさ
ひ年老うる法師ぬくれくるるくるるこ
きかとうるぬ気て同もあるくるまをやらうるく

奥のみうの人所へうまくまくうるおうをそ又ぬ
いくくの事くくとうくいくいくいくいくをおうを
酔ちきくやたちの人をおうまあひやうひてあさは
くおそろ恥のあるくくぬうをくくてを
ゆうをぬ物をとををくるとて編うるを打ち馬車より
おうくくやまうくつぬ物くくをくを駕をうろ
あひゆきくくついひちの門の下なとよむをくくをもいて
ぬ事くをおうくくを年老けうをくろ法師のやを
のうくを所をとあくくやまるぬをくくをひつくうろ
たくくとうくゆくくくくくくくをくくをくを世も後の世を
急あるくくやをたくくくくくくく

ちかづく。賊とうしうひ。病とまうく百菓のもと
きいつめて。弟の病を。深うるところおこれうまんと思う
とうの色とぞひさうんそ。色てうさとを思ひせく。
なくめう。海の世を。人のたをの色とそうるひ。美振と
をくうとぞ。やれうくく。麁まうぞろつ瓜織とかり
て。地獄に深つし。魂を。
生のうをなたをのよ。ぜうとそ。佛ハ浅海かるれ
ハ
ひくうとめうと。なんハ物なを。をのつぞくうた
れつををうるし月の楽。富のあ。たをりとうく
を。ひたとうよ。物浅くく。蛍ぜ。うろうの奥と
うのうををうれくうる日。思ひのふよなのきて

とうとおこうひうをひたなくきひたれくうう。ふお
たりのみをのうちうを。ぞ。ぞ物みえたをやう
うるぞけとひくぞ。ぞ出されうぞとのぞをりた
而うくぞうぞ。物うをうをくを色くうるたとう。
ぞ。ぞむうひくおくくの。ぞうをおう。振のうや
野ぞなをうくぞさうぶ。伏うれるをいひて。をの
上うくのをうをれのし。ふうういひ人のをのう
きてをうをのをうを。ぞとうのぞう。人ぞりを
をうくぞ。ぞひうぞ人をくうをなをぞをきをうる
もうきて。をたうをりをう人ぞ上やをてぞくく
とをれるぞうきて。をうをいをとぞ上ハをうくぞ。

ゆくさきのやゝ醉てうちひまくらをとり
あるーのひきあをさうよもとひくだ屋てうを
なくゝぞきかとうぞ所ーー。扨もきゝ人そいうこと
きりひきーろひくゝまうひうりをうしひ
ろをもをひいうぞうそたのをとおくゝつゝかし

四十

△思ひかぶ松はいつ迄よつをぬく。若ゝ人のおそ
しまゝ、何まうぞ中ぎさやを行ーと。医のうくゝ者よ
いとふまりきのをうるやゝみうさよまよすうれは思ひ
といつてそ

四十一

△鎌倉中書うまくゝ和鞠のけうをおもりくゝ婚ぎ
た。遊のうくゝのうりけ世ぞ。いうくゝをんとゝうこまけうこ

作ゝ赤湯波入道のごきうを乃うを車うたくてゞ
なくゝなりうをうれを一庭よしれて泥ぬのをつう
ひゝなうをたりゝうをうあうを用をおりうゝうと。人
感しあくつをたりゝぶうをとゝのうりのゝ叩うをゝぶうりゝ。
表四中納言のゝくをたをゝふうのゝをやゝはなりうをうを。
の行ひうをーうをゝうをゝうゝと思ひうを
ひうをうのくつゝやーくゝうをうの中や。庭の彼と
年行をうを人ゝくきをゝふうを。まうをうゝはゝをゝをそ

里二

△求所のうをゝひうをゝ内行茶の法神樂とみくゝ人よ
くゝうをくゝ寶敏をうをゝ人をうりうをゝうをうを
をうをうをうをうをあ茶のうをゝふゝ行をうを

畫古座の法親よくこうぶまてたのひやうよいひさ
つまりぶくうつきぶうの人のる兒典侍すりうとうや

四十三ウ

△入宋乃海門道眼上人一切經と將来しくたる法華
のあうもやをぬとりつ所よ安置してごくこ者拂殼
殼と海しく那蘭陀ちとそうをなのやされ
ちと那索陀ちとたいしはきやと江南乃徒とくい
ひつくへきまて西越佛法歌佛ととみくをのよ
不思議す江南をつくうるみ学まくりやされうん
れぶつうる。唐土乃西湖ちるやはしる多勿海ちうと
中天竺別院されちやうる。四月よりさんぎちやうとまい
ぶんちるる弟泉院へ出くくやはる成就乃池

四十四

△如来くこ男だくものぶ書とりふへりやつくひ
たうよりぶくまをぶ粉宮とりふたまれとりふるをぶ
あやまるをてたくしたものとりふなるぶやまのまを
とうくふへしとやつくものーるまを乃ーるぶひは
新華ーるや鳥羽法皇ぶくぶくーあーく書ぶ海
よくぶうまけつ四濃波典侍の日記ーく書ぶると

四十五

△四宋大納言源親ぶくぶをとりよ物とぶ法ぶの家を
られちとけつ家のくあやーさ物ぶつやーあーとぶく
のやけくとあくぶ大納言鏡と山魚ぶりーねるまく
あくしまうあれぶけのちーりぶ法家のあーを。

鉦のちゝりやさいゝゆりはてゝ中さまをかや

四十六 人ゝ牛をゝ角をきりぶくふ馬をゝ耳ときりて。
そちりゝとひちりゝとつきをゝくんとやゝかりをゝ
おちやゝのゝとなるぶくふぶをゝやゝちひゝ龜
ゝゝ是ゝれとうわゝ津のいやゝめゝり

四十七 相撲守四頭の角ゝ松下藤戸ゝ守ゝれ
中さゝゝきゝりけゝよゝゝゝけゝゝのゝやゝ
ゝまゝゝひゝゝ藤戸ゝゝゝぶゝかゝゝくゝぶゝりゝまゝゝゝつ。
きゝれけまゝぶゝゝとの嫁故義家。ゝ日のけいめゝゝく
ひけゝゝゝ折ゝるゝくゝだゝかゝゝ男ゝぶゝゝゝをゆゝゝんゝゝゝ
のゝゝゝよゝひゝゝゝ歩ゝゝゝれけまゝゝゝ男ゝゝり

綱ゝゝりゝゝとゝまゝゝるゝゝ藤ゝゝゝゝ一ゝゝつゝゝゝれは
ゝゝゝゝ義ゝれゝゝゝゝ

四十八
△城陰奥守泰盛ちゝの馬ゆるしたる馬をひ
きぬきをけりつよ是をとそろへくしぬきやと
こゆる紙みくもの是ちゝうきめつるゆとく鞭とく
ちゝりへさをたるもつ又あしの人くしたるよりぬあくね
迷て是をうふくしぬやまちあへしとくのう
さるとちぬきとちゝりしへうとやられすしや
四十九
△右四ちゝやつる茶の中ゆるとよこそのうり
人のちゝぬうふへすちゝへし茶へるとる
まつくうくしたくしたるとをたへし沈よ
くりのくのやうとやつるとみくひうく
はゆあつをのうをとうすひ四をとをさる

を馬茶とをゆ見ぬのうやちゝ反
五十
△ちゝたの道の人ひとひ悪なるとひへとも悪徒の
地家の人よちゝ毎月まきくゆたゆとなくつく
しこてちゝくしぬるとひとへよ自ゆなるとれひ
とくのやゆ蓮紙不絶のをあくをおたちゝの振
蓮ひつひをちゝうてけくしめうゆ得のなやゆ
たくをうてけ反あくなちゝハ失のなうり
五十一
△武者ぬ紙法師まちゝ学問しく目累の程とも
ちゝ法師なくしくぬ世をたつをとをとひを
迷をしへのうよ法師よなんためよをるよ
をうくひちゝ興車のうる男の道導師よ法をれん

時馬をとりあげ、ものをとらせてわたり
をしまぶるうへ、しと思ひ、涙よ仏事の
なぐさめとあらしまし。法師の坂下の
禅坊すきまもなく、四つの角へ、
をくひたちぶつのまきやうにて、
ちつよりくまくまに、ぶつ入けまいい
法師ずゝゆへ、ひさかたりて、年ちよりぶ法師
のこゝろもあらず、世つるのこゝろ
ぶ。法師ずゝつまくぶ、ぶ法師
絶とをつぶ学問とぶ、約束久しくぶ、
こゝぶ、やうをなりぶ。世と思ひ思ひぶ

なるまぶ、月日ぶをくまぶ。
ぶ、ぶくぶ。
ぶ、ぶ井ぶ、ぶのよぶ
ぶ、ぶ、ぶ、

てるぞ。るすもげるへうしんぞ。ぞとうへ。一日
をぞうつくるをひ。へまきたらくぶをすくぞう
ぞくのうくぞ。うまるるくぞ。三のひとまてぞ。十のひ
るぞくうくうとやをぞ。ぞ十ぞすて。十一ようくぞ。ぞ。
ひとつうりとぞおくうんうくへくぞ。ぞくへき。ぞすさ
てぞうまるまてぞ。ぞくぞおくぞまくうまるうよ
うへうくへうぞ。是をとまくひうまくとぞとうんと。ぞ
ひうぞまをとまとぞ。ぞうるへうぞ。ぞうり。京
よまひへうくへくぞ。ぞ山よ。ぞうくまくすてよぞうよ
たりとぞ。西山うゆきてぞ。ぞ。ぞまくうへうとうと。ぞひ
えくうをぞうるを。ぞうくぞ。是山へゆくへきやぞくまくく

きつえゆまきまとぞうとうをうひてし。ぞ。ぞうゆうとう
まてぞ。西山の事うぞうへうまくぞくうう。ぞうひくへ。ぞで
日のあるぞ。一ぞ。ぞの。ぞ。ぞ。ぞ

いひけるとあやまりて相撲のそうしがあるべきことをいとまきれて延下のるすとも信じ多く相撲人は合せ
面のさきさんとも申つるを我もしかしつるもう
きまさだつひさしてしかるべきゆえつかまつ
ひけりよりとも申侍ることうしかるべきこと
おぼゆ也敏とかの則初あつまりて論議とのいかみも
行ちがひすこしきこえ紙ひいぶかしく思ひけりやうよ一大
中間撰とそ侍りへうるまけり

五十一

今日をそるすとなきうんど思てしばらくねいりかたく
てぎさんしくしまつ人をいりとうのてだのめ人を
きこつるもたのさうのことやうひくく思ひけりぬ

ろいひもげるひねぶつくりつるつる事ふかくそ
なきうるへきことをいとしるしぬるを思ひけりとも思ひ
思ひけりとるを行をも一年のうちもぬくのとも一生
のあもぬしかあり
うのを思ひおをのつてぎさりねるをあまをもぬよくを相ハ
宮ありしぶをとひひのうの後まくとをひ

五十二の

事といひ相ありをのてさ相ありをなれぬつを猪を
そうくなとあるそひうくけまぬのしうが年る腐の
とをもぬいるうあとをなすんくをひ行るとぎうつれて
ををしてひををのをるうををりぬをうるう事なれ
あとをのしと思ひをめくをうをひのくをめぬ

くもぞ　そうれんぶたあるるもぞ　男　とそらくとし
でおうの　仏　とぞもりあるとそ　絶　ぞくとぞうのそそと
あるとあるくしぞまくと　家　のうちとおこるひおきめうち
おいてはれぞ　子　なくいくぞくいぞ　つ　交　わるくとぞ心
とぞ　男　なくるあてはぞ　左　うるうくぞ　年　ちうくうあり
さあるとぞ　法　まくぞ　波　まりぞ　づ　なうあるとぞ　ぬ　れ
うひうくるとぞ　心　形　ふるぞ　ぐ　うるうるうんぞのうあ
もぞうあふそなうあうそなうぬくうひうくん
くそ　年　月　くくもぞくあるくうひくもなうあうう
ひまふくぞくうあるうきんぬつうくうるあし
高　ム　ぬくあくぬのくんなうとうあ人ぞうとはれぞあの　ぬ　れ

そくうくそひふあうくぞうあうくぞ　人　の　ぬ　ぬ
くうあうあるくうあるくあうくあ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬくあくあくあくあくあくあくあ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬくあくあくあくあくあくあくあ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬくあくあくあくあくあくあくあ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬくあくあくあくあくあくあくあ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬくあくあくあくあくあくあくあ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬくあくあくあくあくあくあくあ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬくあくあくあくあくあくあくあ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬくあくあくあくあくあくあくあ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬくあくあくあくあくあくあくあ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬくあくあくあくあくあくあくあ　ぬ　ぬ　ぬ

ゆかたびらひとへ五ちやうれんしき

五十五 邪婦のことゞんのまつかてゐ目録さうとうう

五十六 くゝきんゝのゞんとまるまくぐぞかとーまりとどりまで

ゆゝうまあうるんゝうしひつゝなたんのぞうつまうつを

ようぞうくゝゐゝみるうゐのしーあたんゝ山義よとうつ

なる紙みくゝおのきのもちおゐみすとぞうつめくゝ後

ぞのたれくゝこゐ乱をどんのちゝうとみくゝぞのき

まくれうちどと思りしまゞ大ちうあやまるとなうゝしみ

字の法師嗚呼の孫師ぞうひまちうとくゝぞのれは

しうすと思ゝくゝどもあゝくゝしひぞのまの流男よゝ

ちうゐとはおゝうゝへゝくゝすゞ是悲すゝくゝを

五十七 六ゆうん

五十八 五人ゝのゞんとみうゐ眼をゞすうもあやまうゐ乱をゝゝす。

なをゝゝ我人ゝのゞうおうくゝゐゝとゝとゝ

うゝ申あゝしゞすう紙と思ひくゝゞゝまうゝまうう

らうくゝ人ゝのゞおうまゐゐゐうくゝ行とおゝくゝ行とうゝい

ゝくゝ虚をゝとゞゐうゝうくゝ人ゝのゞゞ後とゝを思ゝく。

ゞとゝをゐゐゐ人ゝのゞゞ又ゐうゝ紙ぞうつなくゝ紙ゝを

たのゞゐうゝもゝうくゝゐゝのまうゝもゝうくゝ人ゝ

ゝうまゐうくゝ海ゝうくゝゐゝゞ紙ぞうゝねゝゝゞ人ゝれゝ申ゐ

まゝゝゞゐうゝもゝうくゝゝゝゞゝゐうくゝもゝうくゝゐゝゞ海ゝうくゝゐ

推ゝゞゐゝうくゝゐゝうくゝゐゝゞゝゐうくゝゐゝうくゝゐゝゞ

ゐゝゝゞゝうくゝゐゝゞゝゐうくゝゐゝゞゝゐうくゝゐゝゞ人ゝのゞゞ又推ゝゞ

てぶつれさうめうまと思ひなりて程あやまるもうあ
まとびなりやーむ人あり又こうとうやうとだうりうとと
ものとうぐうらよ人なるとと又ひむひられとどまりと
もいまひおぼつのおうとわそどうくの事なくだん
ぬんとおるーやうくぐうとうくあり又ひとうくあやの
おうとどはめうるとひぬうぐうくまうきもうとやん
いうくうくうんどおるーひうむうなるくぐうくとありひう
人あうとあるの中れだりひうの逆ふぶうくうくうんのあうて
ゆうとあくうくうくあ湖ゆうくもうくうくもうくれふ
ゆうくうれゆうくじあーくぐうきうくうくうくうんれぎうくう
わまうくとみうくうくあうくうくうれとの物どうんのうくう

仏ろやうのどうくうひうくぐ神ーけまくとうるとうんぐのく
ろくゆうくあうくひ

五十八

△弟人久我縄手とや張つけうふ神ふ大はきうう人。
まつうくうの張弦張田丸中乃ふぐとーひうくく金
けうあーくひうりけひうくくみうかとうふ将家の男二三
人ぐきうくあーくよおうくまあーけうきくぐひ人とどうて
いうようるとう久我内大臣ふうくうぐうくうりうのつ
よれうくまあーけうりけうぐ弟みうくやんうるとう人まて。
おりーけうる

五十九

△東だちの弟與朱寺の名ふ海辺の河源氏のひ
いうぐあうくまけうりうふ武大将うくぐうくとどうるまうくと。

たれ門お開れ弘法大師ゆ。悪鬼ゆ。
逃げ去れ。浄身の法華経を。
唱へ奉れば。山海の諸神。
悪鬼悪神。ことごとく。
勢ひ消えぬ。

六十
△法華の法力。
色長武よみ。
西長武よみ。
西方へ。

六十一
△揚子江の法華経。
要用なり。

△撰門の法華宣法寺の伊藤。
唐土。呉の国。
諸の国。
和国。
学律の国。
呉の国。
呉の国。

六十二
△呉市。
仁安の
仁安の
拉られ
呉行

六十三
△退治の下。
退治の
神事。
十月。
十月。
十月

かくこそ不吉の物や

六十六 △勅使の所より勅くだる法師今きたりくだるなり。
立上り法師大なる世の中入さりて天門をみる家の
そばより弟子ゆきたる法師なり。鞭をゆきたるゆきのゆ弟子といふも。
勅の書をうけたる弟や。看経長の肩くだるゆきとそのの
家よりきたれるまた。人おいたるとぶまとくのちと
の世をこそ。財とつくりこしふなりの犯人とたこやく
まくうつ時を。持宮より。きくゆひつくなり。持宮代拝
をもうもろ法法もいきハ。ふ法まへ。まろへ
六十七 △法叡山より大師。勅使の起請といふるハ。無道法。
書りめ所ひるり。起請文といふ中。法曹へ

ふるすいすへの生代をくく。起請文をつくておこな
もるく。改ものるき法。正代。じ事。法事くくや又法令
まるを。水火。職とくくもへ物をもひる迷あるへ
六十八 △法大ちる大臣没。検非使逢の道の時。中門まく使
庭の浮宮おこなられひるくくふ。人章亀の半を
なれて。庭のうちへのくだ大理の座のをきゆりのうをる。
のをつくくれうくをれうり。物を拝奚りり。
くくぼ。と陰陽師のりくへ法りをくへきをり。
くくぼよりお別るを。是あ迷を。
くくる法。又の相国やのくく
いつくりのりくくし。超弱の者へ。くくく出仕の微
まくをくくくよやるくくてはとをうをうへくく。

やしろをけいぶつあるとき
なりけるとすんぶおやしろ紙みくぶやしまうけて
あやしきことつくるをみるとうを
六十九 △魔山法ぶくられてくぶ地とひの毒けるよ大きうる
くらるるぶ魔もしひぶありあつまるとうぶ塚まるる
ひ而の神なるぶいひくぶこのうしくぶけまていく
ある人きぶ勅問あるとけるよみるくるるこの地とぶ
をうる拘るぶ所うなくぶ塚まくられるぶと告人
やされけるうあの物ぶ一人ぶ五よをしぶ出ぶ
者とぶくられるうぶ法とうぶなる人ぶ魔神
を祈るぶとひしるぶ塚物へぶやされ

たるとられぶ深とるうぶく死とぶ火井川よぶのぶく
なるぶ所ぶくるぶなるる
△七十 縄文なるの縄とあるよぶとるるだよれるとうて二
もるの中ぶひぶるのうぶらくぶとあるぶひき出
ひるるぶつ四のまやぶやうよるるをぶ荒巌流
弘嶽伝ぶとるくぶ紙きをる長ぶ出やるのるぶ
いるるぶうるるぶるるくるるるるるぶよる
ぶるるのさるとぶるぶくるるやされる
みるきるるぶやうのるぶるるるるぶ約きる
△七十一 人の面と海をるるのぶるるるぶよきぶねるるぶを
面紙るるくるるとるるぶとるるるぶるるるを

〻のゆとりくゆくとどまるこの海しのあるは
あるをいふくうやいひけるものとも
とそもうくさきるもはまれも姉事をんとてさ
うる悪なれもいつくをうのきんとそひらくと
をるもいとはうるをうひくいうをうを島せ
七十二
△ふこ島をまもの和るりとうりを島せ
ひうよをうををのあるをあ書のゆーをを
島なく対拒意の法をおこるを沼平あり是ハ
るの薬条乃色をを霞つなる気志日のるつ
きう鶏るを喉子島のをを海を遊てきゆ
七十三
△第の事をを笑むへうをすをうるうを人をあくあと

形ひゆへをうをうをうをあるをつをひありとをたのむ
色うをうすあををき和をほろ賊形をりをとくを形へ
ひををけのをふ笑ひやをををを法あるとくだのむへををひ
孔子もと孔子あをを法あるとくだのむへをす新
回を不要るる気を乃家をを形むへをひ諫をう
くをを。ををやうをあをたくををををををを決むへををう
むきをををとあり人の志ををたの事和ををひ変て
を紡をを決むへをを法あるをををを勇をを
人ををたのをををを是なる対ををををひ拒なる
をををををををひたひひををををををををををを
ををををををををををををををををををををををを

用ゐ事はさることなれども
ひがごとやうのものなれば
一毛損ずれば人をそこなふ
人の性はうしなふことなり
所をば慈悲是なり
十五
△秋の月をながめてたのしむ
をかしくこそあはれなれ
うつる翫ぶ事なり
十五
△あの夜はいかにくもりなく
ひかりあやうしひかりゆく
ひかりあやうしひかりゆく
法華経の心浄衣をきくゆく
けはしきおろかなる識の人
うちあつまりすべてやさしきなり
十六
△おほき意とうの楽をもつ
をのをのを相対遊ぶ
とくとくに家よりもちきたりあつまる
是をうまれ大臣を遊宴
とくとくにひきのおのをのに
来りあつまりその遊の国の
△年宣所和臣老の
あつまりひのまやうにあつまりあつまること

中ふうぐひさこれのなくてどくきーなくぶ又使こ
つまくぶ亜番なこのぶりつ
なわとこもやくくとあるまーうこるくくる亜蘭ろろく
のまくうてぎろひくうーまぶこうーまぶこうけぶという
色くぶりて出くぶ出浸をひ
けまもぶつるやぶりふこうるけまぶ人をこつまわめん
ぶりりるくよ指やあるこぶつ
しうまおうくぶりーくぶ海くぶりてめ猫ぶおたい
所の棚ぶふお器ぶみこのおつ矢こる紙ぶ出くこれて
おくくくぶこうーこ海ぶやーしーぶ
ひくぶ数出ぶよるひくぶ奥ぶいくまぶ行りこ矢ぶこ世ぶまて

△七十八 家内ち入道藤器入祇来の沼ぶ色れたる入道の汗へ
出ぶ待ぶとぶりうくぶたいくまこるまけくぶるーまを
られぶるとけるる指一就ぶうるあるひ二就ぶ就ぶ
のひりりいすくやこあぶこ
猪ぶおるーくの人すくぶ猪きくれちるこて年こくよ
ぶるる色利の深指ぶりとすくひこゃきくれけまこ利
こいーぶこるーこ海こくぶめくこのうめ指ぶ年ぶあこて海
こもこもぶ油ぶこうをきせこ
ここくこ人のぶくくまくぶ行ーこかるこ行ーるり
△七十九 おる大福ぶ若のいくぶ人ぶこるぶこーを矢こひ

なかるべし。酒を作る人はもとより酒を作りうんと酒をもうけまつて
やめるの義人とも。酒を作りうんと酒をもうけまつて
もとをむつかしく。酒の糟をへしぎとりて。酒のこと
りあるべきを。人間常住の思ひ違ひ。ぐるまつて。無益
を。新をつくることなれば。是世一つの用心や。酒の事の
用をうるへうしへうす。人の世にあつる自然すつきく。所
業を。欲にあつる。悪をきらひ。思ふく。百万の
銭あつまるといふとも。おもふくも。違をへうす。所へ
やむ時。賊を作るこころあつる。賊をのち
て。つきりなく。新に。
よきあを事あるべし。新と。ほろかをへ。悪をきらふ

迷つて。ほかく作るべきもぞろれでお要をこぶると。へりくれ
沢を。銭を。奴へくべし。ひ用新酒をしらべ
く。貧者銭。まぬうへりすぐ。のこく。弱へ
れうれうとして。そうへがらのことなれば。沢を。
のうむといふとびうるまくむつる。沢
ひ要をしく。物をうくへしびをまかつまく。
おとのとめし人を。富のきくを。
きぶ水のこくまるべしうのぐくるへし。銭
つまくぐ。ぐへうぐるぐ。寡欲おのをぐきひ。
のくくす。百新をるくまくもひとくるへるやく
たのしとを。作人を。百新と。成をしうたの。

求ひ。誘と賊とをもつてこれを祈うひとをうるつくるべ
不孝のまことをうるべす。殘おまとも。用さしは金玉
者と称するいうとうたのひとをしはをきくこそ
人間の貪欲ならくいとくこそまとへすとやのしら
欲をすくだのひとをんとうるこそもつ賊をうり
らんとまこ癩疽をやむ者ばよあひくだりひと
きんとうるこそやさりんしまもちりよいしてそ
貴富ときとろする。寛容は理即よりもつ
欲ちこ。無欲ちにる

△午

狐きんよくひつくこのや勝川海まく金人ばね
たちを見とを狐よくくく仁和ちりくくくくかちれとを

△未

狐三疋うまくぱつきけまを
刀とをきくく是とあをくあひこ狐二疋とけくひこ
ちけ気ちつぬこをすをあけ師をあまくあくを
きなくくこゆへなりうを

△申

四条黄門命をくれていくく。殺れはこてよとうくくは。
面んとうる文者なはこ。先る来ちくくこ。旅色のくしこまい
めくく。黄源のるれとも。横笛のみ穴を。詠いはを
こ。本のはくくこひうよ是とをこそ。なは十の穴
こ。平調。又穴をこ下無調やこるよ。勝絶調とこ
てたるこ上の穴。双調況よ。鬼種調とをくくこ。の穴。
黄種調るこそ況よ。雪絶調と言くく。中の穴。盤涉

調中と云ものあり。神仙調あるべからず。
よって是一律をもつて
のべ給ふ。此の宮の上ろ調子
もあり。不快なり。所詮
のきわくねはをは。相よりひびうつくしく
料簡のいたる。誠よ奥あり。先達相伝
とぶらひ給ふ。能日よ。家業の中伝。
笛ハ。ものさなりつきのうらまくゆくりなる。
このなれも。完ふ口伝のうへ。性質とくへて。
とりてこと。みれ完のこと。ひとへ人よのくわ

もろもろ。ものしらむ人へ。ひたすら物をしづめ
完もあるべし。すべて。もろもろ
もろもろ。呂律のおのおのの
うつくしきのく。先よあるべきもの
なほ。ものしくがてくあれども。
五十五
五もの舞。楽のこと部。
寺の作人。れ中伝。
もろもろ人へ。ものくを。笛のひ
拍子。おのおのくくとくのいたる伝
の図。いたるとも。
乃おれ。楽調のもろ。

よ法ひくぐおうまさうまづうへきかよ二月涅槃會
しんまぶ夏舎まくの中日とひ極楽のう
ならば一調子とりくづ一まのあくともくの行う
りとり夫尼鐘のあるを黄鐘調うへし芝さ
の調子祇園精舎の無常院のあやを西国ものう
ようしうへうようへしとくあうう度づくれに
まとうまうまぐりけうと孝国うが弘まけうど法
金剛院の鐘の撞ぐうまうしうへうや

△建治弘安の法華宗の日よ放免の つをあやく
やうなう鎧の布で夏帽ぐまくるとけくつまくを後
ようどうしうとしてくるの井ぐけうう水平ようを

てうのしなくいひくづりうしうよみひけ
なるを奥あるまくをうひとくくそけりしあて
老うう尼志とを乃今日とうまを行うやばうへつを
をの手と為くを巴差とのかようでまの入たりう入
物とだくけきくだむの袖と入りうをくこの
うをうて張うよりうすづの天つたぐうむありけぐ
いやうくを

△法華行者宗弘教東二条院へ第まひけうう老尼
の遠者うをけるの勝利おとをけをのれて
光明真言貴医王陀羅尼とやうれうとうう紙背子
とをづふくへやうをう念仏よまうをうをさ

ちかものとうだなとかなどは
ぐぶつぐやうにたれば我家をん
ぐぶつぐやうにたれとそまうぐぐ稚子
ど長福寺はしぐぐ巨岩あるへしとうきぐ強みつとぐん
及ぐひぐぐぶつぐみぐぐぐぐぐぐてどぐぐをのぐぐ
いりくやうぐんど思ひてぐ本願のぐぐりるうまつぐぐ此
人ぐぐちぐぐ泡屋ぐぐぐぐぐつるやぐぐぐぐぐけり
八十五
たつの御ひとのぐぐ幸ぐぐぐぐぐ鶏と剣のぐぐぐぐ人ま
ぐぐぐぐ仏事や
八十六
陸奥国ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ

を作とむぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
のへとりさめ作りぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
とうぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
ぐぐぐぐ
八十七
多久資ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
てぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
むすめぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
の根元や佛祖のぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
おぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ

[illegible]よをへさきのぬきうちとりて
後白羽院の御時、信濃の国の住人長[illegible]
[illegible]けうの楽府の御[illegible]
[illegible]とかうの[illegible]
[illegible]
[illegible]

さらしいくたくを

九十二 又家国義まるぐちを掛ありける藤大納言為房卿
惠海一条法上人とも言ひ惠心とも言ひける
みそとうしけくみぐく掛ありだそとつんひきくまえ
猟人のやうおぼいおくびのそふうとあれさ
つまうくとうきれてぎとひうをかたりおそ絲のそ川
絲をを掛りけるとそ

九十三 園の別当の屋敷へ行ける所に女人の
のしくまくぐ〜さ鹿とはくく〜たりとれしぐ合の
前入るの庭下とまくやとぶくとも。たやをくぐる
てもぐく〜となりひいたるくとの前のるぎうく人そ

てぶかと百日の鹿をときかゆうと今日ぶれ行うへき
よあうすまをくやこをきをとくきられうぐ
るぐ美くしく奥ありて人とも思へりけるや。
うう人が山太政入るるよおうこうぐやされうとれたが
やうのしをの連をぐうふうきくぐかゆうるうぐ
ゆうよ人なくをうくうきくんとりひきくんを拾うう
まうんが家百日の鹿をとぎきくんとの行うう。
れのしくぐほくとく人のうこいのをうぐとれりく大
まかうまひくく奥あうこうるも奥なくてやをこう
ちうのまうのくう事をうぐまを人の賛嘆なくを。
いくぐれくきやうぐとるをうくうを撥よよれ

ことごとくそこなひてどうぢやうの人
よめとりをさそひてゐたりとなん
いひさだめしのあるひさしぬぎむとうちくこん
まんと思ひ勝負のまをつきなし
たるむつ

九十四

すみくに人をまねきあつめ給ふ
子のごとき海をおしうめ
いかつちの史書のみちびきたるにしたがひ
しうとをいたはりすまもとぼけて
なりて又ある人の評すて碁法師の相撲ときこん
とくひいてめしうをしんとおちうのひとつぼちく

つまりうとしをくつをとりあつめ男の中よあ
うすまゆるゆるのぬるきびうくの柄ありやなとひ
をこれもつめとれかつちもひいはなとひくふこそめ
くくはかりのひいきちうをぬうぬとるりさよ
ひとりさうやとかくうづくうるときびくくの
柄をひりのまとやいひてうくねねとそあつ
人ほらまつかつ夫人をすこのすもくうくこ
ろくはゆるなるまのとうあくしと思つゆす
ゐをさとありくくとうとうやくくしかきく
ちうくんりまをちつ男女むかるふくうくをを
まをもとおかくかくちうくにんのとうをまは

ぞうくに思ひつうるものや箔のとうばなれうさ
まおよそめ紀亦そうる義父しくんとをいうわ
ゆすうつうあり

四十五

人の物をとひうるおもうしもあうしぞのまく
にいうんをおこうまーとうやひまとうやうよう
をわうとーうぞうくぬる事やぞうる事もれ
さううすと思ひくやとうみうんと又減よきいぞんも
なうるおうんぞうくうよのひきうをうんはと
すくぞうすまーんをいはくぬうぬとと
ひーうまうるうまうよぞうるうぬとと
さなうるいひやきまもうんのすはまー

うとぞはーうとひーうはうるうるひうるおれぬやうまり
めうるうとをのうくうるひうりもあ連
もはほうるおうるぬやうよはをうまうんあうう

九十六

連年人年ーうんぞうやうのるすへ物なれぬ人のぞうるや
立あうる家ーまるぞーるうる人ひのまくぞる事
うーあうーなれ亦ーまるぞ名ひうるぞうる人
猫ぬくうーやうの物もぞ人ぞうれ物ぞ亦うる
ゆうをすうるおくまるおうるいはけーうるぬうるあうる
うるく物るうー又強ーまるぞ亦れなる亦ぞうるの新
来るうるくうるうるみうーるぞうるあうるまーうはう
ーうるうまーー庵宅うるく物をうるーう猫うるひうる

念のかきまくらに兼房といふものが
きうやあんじうゆめまくらに腰のうち
うしろくのこゝろにかゝる
丹波ノ国大江山といふ所あり大江山とうつてめぐた
くたくまりたるのなかうしとやうたかなまた
秋の法を海上人をかもつ人あまたかうひくがさ
ゆへおもはすこゝろいりうめさきんとそつゝして
いえたりよ名おうそゆゝしく伝おこうもつ
おすうの狐ようさいなむうしろさまよりう
たりけまたよ人いこ
山狐のうらやいやめつゝ久加あんとう

滅ことていふ法ゝ法勝の事をいはんとうめ
もや悪下なりといへまた
他ようとまうたるの部のつとよがうんなといふよ上
人ゆうつまくゆとまうしまめへきの新
きうの神宮とようひくぶ山社の狐子のそう
迷やう宮くすくひあうこゝろんたとの
もや、といふれけまたまた事ふひうたまた
色ともの仕まうの宰牲ようやくぶよ
つまくすへうをていよけまたよ人の感涙く
つうよなるうたり
やかいまこふをゆうこの物くさ海ようこさ海抑よ

うるへきうや巻物なとをきくさ屋よをきくすの
あらひうるを紙ひひつくとを一くぽひつくをうり
もたくさ屋よををくうぬ筆しうひうーと三条
右大臣殿作らまこさ動毎のかの乃家ハ誠之の
人くをうるもうくさ屋よをうるーを摸
さまをすくを迷作り天
九十九 法師分を安の自讃くを七ケ条書をあしら事
ありこれ馬義さをうることなれ事とをなりうの
先ーとをりひて自讃のを七ケ条
一人あをうれくを花をあたこを家勝光院の色よ
てをのこの馬とをしらけうとをくを今一度をと

たひうを拙るーハ馬たかをまくをしをうーをうへ
とくをあををうるうーをを馬とをををををを所うくを
河のをやまをきうをを紙ををれ感を
高式をうをを坊よををうーをを方里を絵法所を
をををを源川大納言殿絵巻ーを作さーを今あ
事てをうるうーを源氏の里文の巻ををうひう
ををうくをを今古所をくをひをうをををを
ををくををとをを文をを法華ををををををををを
ををとを法華をを迷ををを源氏ををををを出をれををを形をくを
ををうをををををを形ををををををを元の

壹ぞうこくのをとゝ御ぶつとゝ
とゝくのてさいつを行きざりなとのことを問ひやり
常の事なまとむりしの人をいさうの事とも
いとゝ自濃しらやぶ鳥羽院乃正方より袖と
たりとゝ一つのうちよりあつうまうんやと宮をもつよ
為御ぶつまとうり

秋の夜入ぞ月多りとの光をたづねてさ
神ゝ袖とゝ西らんと行まとゝ行事のさつ向へきと
中さまとうる事もゝ浮よあとうりくゝ中ゝのと芸恨を
さの裏かすりとる軍ゝ
をうま行らなるゝ元象相国御伝の歌ばりをゝ

なりとゝ少比題目をゝ
常上皇乃御天覧ゝ
朝臣清書しくゝ
行の心乃ぞ
タとをくまとゝ
の歌とゝ
くゝををりりをのま
乃りゝ今ひやとくゝよ
な波さゝ人しとゝ
り数多の心乃
数行ぞと不審数を

ものうやうやしく孝心なり

四 人のうへをすひくに三條の礼のるゆゑ横川の常行堂のうち諸尭院とうきうるゆゑ彫あの作理行成乃あひ[illegible]ひあるまゝ[illegible]数きもとゝ中絵くりと。尝陳ゝくゝ[illegible]作一と行成なゝ[illegible]ゝ[illegible]作理すゝと竜也ゝへの[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

まつてゝ　ろ　ゝ　ゝ　ゝ

ようきくおうとふ、あうとまうす、いづこ中へづつ
もひとくきゆさよびひすくきれさきあんど
ひとめくくらしあいるさよ行るとりおいつる
この、こまをんで年月のうつる頃もあり一条山の
なくもおひくうしうたきゆふのくるくも
あくめずくくそのくれどもうるひさしんで
たくひはるすおくるくしだおるくん
よつまくくもおくくびすくく年をたをすし男を
くくおやくくえ男のためよおくくう男とづくくく。
るくしやうむくくをびたをくれどうをるをむ
ひおくくんもおくくくおりくるんでとくおい

おうくくえ坂の毛ううくさ家のおくくう月よくく
すくみりたくくくの家をくくしをのあやもつう
男さまうおくくくくくもおくくくしくんをくくこの
まおくくくうまくくく

百二

豊月ふまくくおくくまくくおをやくく
うをねひとくめうくくをくくくくくく
さまうをくくくねすやくくく病ふおくくもおをくくくひさ
なくくくく死をくくくまくくくくくくく病急
くくくく死よおくくくくくくくくくくくく
おくくく生のあくくくよおくくくくくくくく
をくくをくくをくくを思ふくくくくくくくく病くくくくくくくくくくくく

時。而弘。一事をも。はからはなくて。年月を
徒らに。をくりすぐし。度々。命をも。
きしぬ。成りゆくさま。はるかに。おそろしく。
てい。称うひとおもをめやすくなりぬれば。
もあるべきものとみえて。ひさしくのこりぬ。
らめ。ものすごくいうなる。心ひとつにして。而弘と
成しく。仮。眠ありつるに。ものとしてを。而弘つ人へ
うしたいかの。幻のまぼろしよりはかなきこと。
弘。皆。無。おもうり。而弘。心迷。乱。
おつるに。ものをいとなむ。第。
しくぶ。ものうけ。なくて。心。

ゆ。ものうつ
やあ。ものいとなむ。ものをひとつ人へ。若
楽のためにあり。楽。
と。求。いやしみ。
楽。欲。
なる。二種。あり。
文。欲。三。
も。是。頭。
あり。
八。
年。文。
抱。
と。人。
人。

又佛のまことにいたりてはこれ又
愛ひをもつて仏をもとゞけの者ひをもつてあるべきなり
又ごとの佛一つをもつてこれをもつて機のこゝろをもつて
きはめこれをもつてこれをもつてめいのひとつ第一の佛をもつてこれを
佛すべきをもつてのほかあるべからざるこゝろなり
又やまのたんどくのひとつをもつてこれをもつてこれをもつて
こゝろをもつて佛をもつてこれをもつてこれをもつて

正保七 酉 南呂吉旦開板